

# 国立 滋賀医科大学

プログラムの名称：地域「里親」による医学生支援プログラム

-- 地域医療を担う医師・看護師の育成をめざす地域参加型の学生支援

プログラム担当者：医学部 教授 永田 啓

キーワード

1. 地域医療の担い手育成 2. 医師・看護師育成 3. 地域参加型の学生支援  
4. 里親 5. プチ里親

## 1. 大学の概要

学生への支援に関する目標

本学の教育目標は「幅広い教養と医学及び看護学のそれぞれの領域に関する高い専門的知識及び技能を受けるとともに、確固たる倫理観を備え、有能にして旺盛な探究心を育成すること」である。本学における学生支援は、すべての学生がこの本学の教育目標水準に到達できるよう、個々の学生のニーズに応じて取り組む支援活動として位置づけられており、その目的は「すべての学生の安心で快適な学生生活と満足な教育研究活動の実現」である。具体的には、学生のニーズに応じて、修学面、学内外の生活面、健康面、経済面、卒業進路面から支援に取り組んでいる。また、障害のある学生や留学生のように特別な事情・困難を抱えた学生については、個別の支援体制を整備している。

## 2. 本プログラムの概要

現在、地方での医師や看護師不足は深刻であり、地域医療を担う医師・看護師育成が強く求められている。本学では、地域の福祉施設や医療機関と連携して学生教育を進めているが、新たに、「地域医療の担い手育成」を明確な目的とした学生支援策として、本取組を立案した。

本取組は、従来の学内スタッフによる学生支援と連携して、地域での医療活動を志す医学生に対して、入学初年より、卒業生や住民を「里親」「プチ里親」として配置し、地域参加型の学生支援を実施するものである。

本取組では、地域で活躍中の卒業生を「里親」とし、献体登録者や模擬患者などとして本学の教育にご協力いただいている地域の方々を「プチ里親」とする。学生がこうした「里親」「プチ里親」と交流することで、地域医療へのモチベーションを持続発展させると同時に、地域住民の医療に対する思いを理解し、地域医療の担い手として成長することが期待できる。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

(1) この取組の動機と背景

現在、大都市部に医師・看護師が集中し、地方では医師や看護師不足による深刻な医療問題が生じている。滋賀県も例外ではなく、地域医療を担う医療人の確保と育成が本学に対しても強く求められている。地方で医療人の不足が生じる背景には多くの要因があるが、国立大学として設立された大学での医療人養成においては、世界や我が国全体を視野に据えた教育が行われても、地元地域を具体的に意識した教育が希薄だったことの影響を指摘する声がある。本学においては、地方特別選抜を早くから導入し「地域に支えられ世界に羽ばたく」ことをコンセプトに、入学時から地域の福祉施設や医療機関と連携し学生教育をすすめてきたが、現在の地域医療の状況を鑑みて、「地域医療の担い手を育む」ことを明確な目的とした学生支援策を実施する必要性を感じ、本取組を立案した。

(2) この取組の意義

本取組は、将来地域での医療活動を希望する学生に、入学時より、地域で活躍する本学同窓生や地域住民を「里親」「プチ里親」として配置することで、地域医療

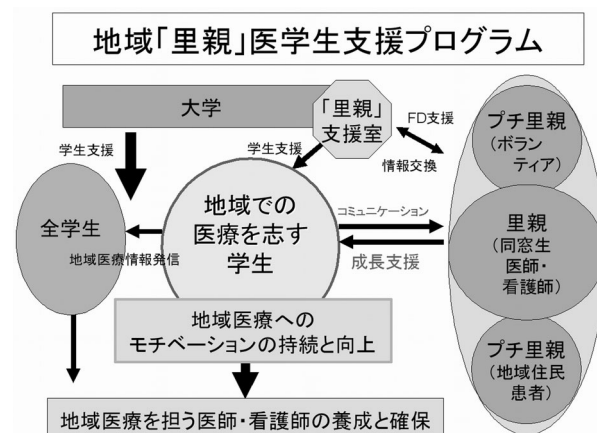


図1 概略図

## 事例15 滋賀医科大学

に対する関心を持続・発展させ、「自ら望んで地域の医療にたずさわる医療人」を養成することを目的としている。

本プログラムの実施は、「地域の医療を支えたい」という学生の「初心」を育む支援策であるとともに、地域の医療に貢献する人材の養成という大学の社会的な使命に応えるものでもある。

### 4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

#### （1）新しい発想や独自の創意工夫

本制度は従来の学内スタッフによる学生支援に加えて、入学初年より地域での医療活動を希望する医学生（医学科・看護学科）に、地域で活躍している本学卒業生や住民を「里親」「プチ里親」として配置し、地域と大学が協力して学生支援を組織する点が、本取組の独自な点である。

「里親」は、県内で働く（本学を除く）同窓会の医師624名、看護師26名の協力を得て本プロジェクトの趣旨に賛同し協力していただける同窓生を「里親バンク」に登録し、学生の特性（性、出身地域、関心のある診療科、所属クラブなど）とマッチングさせて配置する。「プチ里親」は里親の紹介や既に活動している病院ボランティア（50名）や模擬患者ボランティア（20名）や献体組織である「しゃくなげ会」会員・家族（1,345名）の方々に協力を要請し、学生との交流を組織する。

学生と「里親」「プチ里親」との日常的な交流は、インターネット等を通じてコミュニケーションを取り助言や指導を受けるようにし、さらに、春夏冬休みには、里親を訪れ面接によりコミュニケーションを取れるようにする。

学生は、春夏冬休み以外にも、1年次「医学概論の早期体験学習」、4年次「自主研修」、4年次「社会医学フィールド実習」、6年次「学外（地域）臨床実習」などのカリキュラムを利用して、「里親」「プチ里親」の下での長期体験実習が行えるように工夫する。一方、「里親」「プチ里親」が、「医学概論」、「地域医療特論」などの講師として、全学的な教育にも関わる機会を設ける工夫を行う。

大学としては、学生支援が「里親」「プチ里親」任せにならないよう、大学と「里親」「プチ里親」と緊密な連携を図るとともに、「里親」「プチ里親」に対しては必要なFDを実施する。また、学内に担当教職員を定め、学生並びに「里親」「プチ里親」支援を行う体制を作る。

#### （2）他大学の参考となるか

地方の医科大学・医学部は共通して地元で活動する医療人の養成・確保が強く求められている。本学の新しい学生支援の取組から得られる教訓は、こうした他大学の医科大学・医学部にも役立つと考える。

また、地域のボランティアの参加による学生支援という取組は他の学部にも参考になると考えられる。

### 5. 本プログラムの有効性（効果）

#### （1）期待される効果

地域医療を志す学生は、地域で活躍中の先輩を「里親」、地域住民である「プチ里親」を持ち交流することを通じて、地域の特性を理解し、地域医療への関心を持続向上させるとともに、地域住民の医療に対する思いを理解することができるようになると期待できる。こうした効果は、地域医療を志す学生が自発的に地域医療の担い手となり、地域医療を担う医師・看護師の確保と育成につながると期待できる。

また、近年、学生の対人コミュニケーションの未成熟、社会性の欠如などが問題となっているが、本プロジェクトでは、「里親」や「プチ里親」とのコミュニケーション方法をインターネットや携帯メールの使用から始め、対人コミュニケーションに対する敷居を下げることから対面型コミュニケーションをとれる下地を作り、真摯に人と向き合い、きっちりとしたコミュニケーションを取れるように工夫しており、医療人としての必要なコミュニケーション能力や社会性を養成することができるかと期待される。

#### （2）現在の学生支援との相乗効果について

現在の学生支援は、学内スタッフが全学生を対象に行っている。新たな支援の取組は、将来地域での医療活動を希望する学生を対象に、同窓生や地域住民など学外者の力に依拠したものである。

学内支援組織と密接な連携をとることで、当該学生だけでなく、全学の学生に対して従来の学内スタッフだけでは発見できなかった支援課題に気づくことが期待できる。

また、学生支援のあり方について、「里親」や「プチ里親」を交えてFD等の場を通じて議論することにより、教職員の能力の向上も期待できる。従って、新しい支援の取組は現在の学生支援と相乗的な効果を発揮すると考える。

(3) 社会的ニーズ・学生のニーズへの対応

地域医療の担い手を養成することは現在の強い社会的ニーズである。本プロジェクトは、まさにこの課題に正面から取り組もうとしている。

本学入学時に動機を尋ねると「地域の医療に役立ちたい」と答える学生は少なくない。しかし、先にも記したように今まではその学生の思いに正面から応えた支援策は実施できていなかった。本プロジェクトはそうした学生の思いに応えるために実施するものである。

(4) 教育活動や研究活動との関連性

将来医療にたずさわるものは、人間関係において豊かな経験が必要であり、社会のニーズがどのようなものであるかを単なる知識としてだけでなく、身をもって知っておかなければならない。しかし、現在の医学・看護教育では、こうした経験を十分に積ませることができていない。また、社会全体の人間関係が希薄になり、大学までの教育や生活で、従来積み上げられてきた人間関係の経験が減少している。本取組は、こうした点を補い、学生の人間関係の経験を広げることで態度教育としての効果が期待できる。直接、「里親」や「プチ里親」と接触する学生は限られるが、そうした学生の経験が他の学生にも波及することが期待できる。また、プログラムとして学生の経験を学内に広める機会を設定することで、全学生に対しても態度教育上の効果が期待できる。

6. 本プログラムの改善・評価

評価体制と方法

本取組を担当する支援室を組織し、実施調査及び評価調査を行う。

(1) 実施調査

実施調査は毎年2月と10月に、インターネット、書面、聞き取りのいずれかを介して実施する。調査項目は、交流回数、交流内容に加え、学生に対しては得られた成果、感想、「里親」「プチ里親」や大学への要望を、「里親」「プチ里親」に対しては学生への要望（態度、言葉遣い、社会的常識など）と大学への要望についてとする。この調査は、学生への支援内容や学生へのアドバイスに反映できるものとする。

(2) 支援効果の評価

支援効果は、毎年2月に対象学生の「地域医療への

関心度」が向上したかどうかを判定し評価する。具体的な評価項目は、地域医療に関する関心度（5段階）、自らが担い手として活動する決意（5段階）、不安なことがら（自由記載）とする。経年的変化を検討し、前年度（入学時）に比較して評価する。

(3) 評価結果の活用

実施調査の結果は、学生及び「里親」「プチ里親」に支援室員より個別につたえ、個々の支援内容に反映させる。

評価結果は、支援室で分析検討し「里親」「プチ里親」の意見も踏まえて、次年度の支援内容に反映させる。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

(1) 年度計画

(i) 初年度

本取組を行う実務組織（「里親」学生支援室）を立ち上げる。

支援効果の判定のために、現在1年に在学中の学生を支援実施前学年の学生として「地域医療関心度」調査する。

同窓会、病院ボランティア、模擬患者会、本学献体篤志家の会に対して、本取組の主旨を説明し、「里親」「プチ里親」の募集を開始する。

本取組を行う実務組織を立ち上げ、サポート用のDBサーバー・Webシステムを構築する。

「里親」「プチ里親」FDを、大学及びインターネット上で行う。

(ii) 2年度

新入生に対して支援プロジェクトを説明し、参加学生を募集する（40名程度予測）。

募集した学生と、「里親」をマッチングさせ、夏休みに実施している医学概論の早期体験実習から、「里親」支援を開始する。「プチ里親」も随時紹介する。

(iii) 3年度

前年の評価を踏まえて内容の修正を行い、新1年生への「里親」のマッチングを行う。

2年生には、本人の希望による追加参加を含めて調整を行い、また、授業に「地域医療特論」を配し、2年生全員が「里親」「プチ里親」の話を聞く機会を数回設ける

(iv) 4年度

前年の評価を踏まえて内容の修正を行い、新1年生、2年生の取組を行う。

## 事例15 滋賀医科大学

3年生では、対象学生による地域で学ぶこのプログラムの中間発表会を他の学生に向けて行う。

ここで4年間の取組のまとめと評価を行い、次年度の取組にフィードバックする。

### (2) 組織性の確保

本取組を行う実務組織(「里親」学生支援室)に、大学側から、担当職員・担当教員チームを配し、地域側から、「里親」「プチ里親」の何名かに専任の非常勤職員を担ってもらい、地域参加型の学生支援の体制を整える。この「里親」学生支援室が、取組の取りまとめ及び分析を行い、この分析に基づき、担当教員チームが実施計画を点検評価し、各学年担当教員に評価に基づく学生指導を行う体制を作る。

### (3) 人的・物的・財政的条件の整備

「里親」学生支援室に対して、学内の人的資源を活用すると同時に専任の非常勤職員を5名配置する。

「里親」と学生とがどのようなコミュニケーションをとったのかのデータを集積するサーバー用のコンピュ

ターシステムとデータ解析用のコンピューターシステムとを配置する。

「里親」と学生との対面コミュニケーションのための交通費及び交流のための財政的処置を行う。

これらの経費の支援を本プログラムで補助申請するものである。

### (4) 将来への展開

医学科は6年、看護学科は4年で卒業であり、本プログラムの補助期間終了後も継続性をもって医学部学部教育の一環として取り組む。また、看護師は4年後の卒業生の動向、医師は、6年継続した後の卒業生の研修動向、及び後期臨床研修の動向を最終的に検討して支援の効果を最終判定する。

本プログラムの長期に亘る取組は、地域医療を担う医師・看護師の養成にかかわる多くのデータを提供してくれると考えられ、この成果をもとに、今後のカリキュラムに反映させ、地域医療を担う医師・看護師を一人でも多く社会に送り出していきたい。

## 選 定 理 由

滋賀医科大学においては、学生支援に関して、明確な理念と目標に基づき積極的に取り組み、充実した組織体制の下において、学生支援施策に対する充実した評価・改善方法を構築するとともに、学生支援に係わる教職員の資質向上にも十分な取組を実施し、正課・課外の両側面にわたって多彩かつきめ細かな学生支援対策を進め、学生支援に大きな成果を上げています。

今回申請のあった「地域「里親」における医学生支援プログラム」は、社会的ニーズに対応する「地域医療の担い手の育成」という明確な目的を持ち、しかも従来の学生支援と連携を図りながら、卒業生(地域で活躍中の卒業生)を「里親」、住民(献体登録者や模擬患者などとして教育にご協力いただいている地域住民)を「プチ里親」とする地域参加型の学生支援を実施するという工夫を凝らした独自の取組であると判断します。

特に、医学部学生の抱える悩み・不安に着目し、「里親」・「プチ里親」との交流を通して、学生の不安や悩みに対応しつつ学生の人間的成長を図り、学生の地域医療に対するモチベーションを喚起しようとする積極的な取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。